

個人

東京都

被災した故郷。
被災地での取材の中で感じた「育てあい」。

櫻田 彩子 オーケープロダクション

取材日 2012.1.27

元仙台在住。フリーアナウンサー・レポーター・ナレーター等をこなす。現在のレギュラー番組は「ちい散歩」レポーター（テレビ朝日）。「震災復興と生態適応 グローバルセミナー東北2012」「低炭素杯2011・2012」「一村一品大作戦全国大会 2008・2009・2010」など環境イベントの司会、コーディネーターも務め、エコに高い関心を寄せる。

3月11日 14時46分

東京・千石にある近所のスーパーに買い物に出ている。最初は地震だと気づかず、通りにある動物病院のガラスがビニールのように見えた。なぜビニールなのだろうとよく見ると、中の看護婦さんがすごい顔をしている。それでガラスが波打つほどに揺れているとわかった。大きい通りまで出たが揺れはひどくなっていて、ビルとビルが道路を挟んで反対側に揺れていた。そばにある標識につかまっていると、ビルからたくさん人が出てきて、道路の車も止まり、落ち着くまでそこにいた。

「宮城かもしれない」と思い、宮城県にいる両親、兄弟、夫の両親、知っている限りの親族にメールをした。返信はすぐに返ってきた。母からは「電気が消えてご飯が炊けないよ!」というメールが来たので、大丈夫そうだと安堵して帰宅した。エレベーターは止まっていたのでマンションの11階まで階段で登った。部屋に入ると棚からさまざまなものが落ち、食器が割れていて、これだけで大きなショックを受けた。

とりあえずテレビをつけて見たら、仙台の放送局が生中継で津波の状況を伝えていた。テレビの前で動くことができなかった。夜になり歩いて夫が帰宅するまで、トイレに行くこともできず椅子に座ったまま、ずっとニュースを見ていた。ひたすら涙が流れた。

それからは誰にも電話が繋がらず実家とは4日間連絡がとれなかったが、おばあちゃんの家への黒電話だけはつながった。それで震災直後は時間を決めて皆でおばあちゃんの家集まり、そこで用件を済ませていた。

東京からの物資支援

仙台と連絡がとれるようになると徐々に、「何がない」「あれを買っておいてくれるとありがたい」という話が聞こえてきた。宅配はすべて止まっていたので、送れるようになるまでに買ってこうと、エコバッグをたくさん持って夫と買い



物に出た。ガスボンベがないと聞いていたが、これは危険物なので郵送することができない。日持ちのする食べ物や缶詰、電池を買おうと思ったが、東京でもすでに売り切れていた。電車を乗り継いで何軒もお店をまわり、少しずつ買いためていった。

宅配が送れるようになると、仙台では卸町か富谷の配送所に届けられ、あとは現地の人が取りに行くシステムで動きだした。それで実家の住所で送り、配送所まで車で取りに行ってもらうように



撮影：2011.9.27 岩手県 大槌町

して何回か荷物を送った。最初の時は荷物の受け取りに3~4時間並んだと聞いた。ライフラインの復旧に時間がかかることがわかると、お湯を沸かせるよう電熱器を買って送ったりもした。そうこうするうちに、東松島市や岩沼などいろんなところで困っている人がいることを聞いた夫の母から、荷物を送りたいから買える物があれば送ってくださいとリストが届いた。個人的に友人や番組と一緒に仕事をしている人たちにお声がけをし、衛生用品や下着、Tシャツなど細々したものを何度か送った。

仕事は軒並みキャンセルになるだろうと思っていたが、火曜日から仕事をする事になり驚いた。今思えばすぐ仕事があったのはありがたいことだったと思う。友人と安否確認のメールをやりとりする中で、「宮城は本当にひどい状態だから少しでも働いて何とか世の中まわしてくれ」というメールが来た。何人もの人から同じようなメールが届いた。そういう風に思ってもらえるのだったら、今は何もできないけれど、とりあえず目の前のことをやって、ちっちゃいちっちゃい経済でもまわすことが「できること」なのかと思った。そのメールの言葉は、涙が出るほど嬉しかった。

仙台に帰って

GWに仙台に帰れるようになった時、東松島の月浜に荷物を届けることになった。私たちは仙台出身者だけでも、そこで被災した人間でもない。届けに行く名目があっても行っていいのか、邪魔になるのではないのか、もしかして嫌な思いをさせるのではないかと迷いながら届けに行った。20軒ほどあった民宿はちょっと高台にあった1軒だけが残っただけで、浜の民宿ごと全部瓦礫になっていた。その情景を見た時には足が震えた。一方で、自分が被災したわけではなく、もっと大変な人たちがいるのに私たちがここで泣くのは卑怯だとも思った。ものすごく、無力感を感じた。親や親戚、友達は「大丈夫」としか言わない。「庭で煮炊きしているし大丈夫」と言われていたが、実際に行ってみると全然大丈夫ではなかった。ご飯も食べていない、あったかいものも食べていない、水もないけれど雪で食器を洗って工夫をしながら、皆ずっと我慢をして暮らしていたことを知った。

被災地の取材

仙台出身であることから、9月に東京の番組で取材に行くことになった。その時は角田、釜石、奥州へ、企業にお話を伺う形で取材を行なった。皆さんそれぞれに大変な状況を過ごしていた。一緒



撮影：2011.9.12 仙台市若林区蒲生

にその時間を地元で過ごせなかったことにショックを受けた。今までずっと宮城で仕事をしていて、沿岸地域でも多くの場所で取材をさせてもらっていた。イチゴ、ホッキ、カキ……あの方達はどうしているだろうか。

いくら東北の人間だといっても、あの揺れを体験していない。なんと聞いてよいのかわからなかった。ところが実際お話しをしてみると、あの時の状況を答えてくださる。たまたま街頭インタビューで、釜石のある工場の経営者ご夫婦に話を伺った。「大丈夫、元気だよ」と笑って仰る。工場も家も流されちゃったけど、私たちも従業員も元気だから——と言いながら泣いている。何も言えなくて、ただ一緒に泣いた。クルーも皆だ。各地で大変な思いをなさった方にお話しを伺えたことが、ありがたかったと思う。親戚や友人、親兄弟は、温度差があってもずれたことを聞いても許してもらえる。取材をたくさん受けて嫌な思いをしたかもしれない、話せばどうしても辛かったことを思い出してしまう。泣いているということとは、思い出したということだ。それでも見ず知



撮影：2011.4.13 宮城県 南三陸町

らずの初めて会った方が、丁寧に話してくれて、笑って「ありがとうね」と言ってくれた。極限状態を経験した人の懷の中で許してもらっている感じがして、とても救われた。

震災を振り返って

千年に一度のこんな大きな地震が来るだなんて思っていなかった。昔の絵本や口伝を読むと、「津波でんでんこ」のように後世へ伝えようと多くの伝承が残っている。警鐘を鳴らし続けていた方もいた。それでも、どこか他人事だった。

昔の人たちが教えようとしてくれたことを、私たちがこれから先伝え続けていかなければ、また同じことが起きる。今ここで何かをしなければ、歴史を途絶えさせてしまう。津波はもちろん環境のこと、温暖化のこと、すべてつながっている。何かすることをやめしまうと、歴史を止めてしまうのかと思うと、歴史は生き物のようにも思えてくる。昔は外で遊ぶ中で虫や生き物たちと遊び、動物としての人間という部分があったと思う。今は誰かが教えてくれないとわからない。私たちは伝え、継承していく責任を果たさなければいけないと思う。もう震災前には戻れない。

今回、いろいろなことに臆病になった。何々を言ったら相手を傷つけるのでは、何かをすることによって誰かを傷つけてしまうのではないか。それで何が嫌かと言ったら、相手を傷つけたことで傷つく自分が嫌だし、怖かった。でも、釜石のご夫妻のように受け入れてくれる方もいる。被災者と呼ばれる人たちにどんと胸を借りて、こちらが傷つく勇氣も時には必要なのだと思った。謙虚や感謝という言葉をこんなに実感することは、今まで生きている中でなかった。育てあいをしてもらっているようにも感じた。ボランティアをする、あるいは話を聞く時も細心の注意は必要だが、臆病になって何もできないと何のコミュニケーションもできずに終わってしまう。これからも、自分に

できること・動けることがあれば、長いタームでつきあっていこうと思っている。



宮城県栗原市 飛び出したマンホール



撮影：2011.8.6 鎮魂と祈りの思いを込めた仙台七夕飾り



撮影：2011.11.1 大空にたなびくこいのぼり



撮影：2011.8.16 鎮魂の灯火